一夏の思い出

絶氷のシア

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

一夏の思い出

【Ｎコード】

Ｎ２８８７Ｔ

【作者名】

絶氷のシア

【あらすじ】

今回も憂ちゃん視点で挑戦してみました。海に行くお話です。

こんにちわ、平沢憂です。
今日はお姉ちゃんの所属する軽音部の皆さんと一緒に海に来ました。
「わぁー！」
目の前に広がるのはとっても色鮮やかに澄んだ色をした海。
そして綺麗な砂浜。
まさしく貸しきり、プライベートビーチとはこのことを言うのでしょうか。
朝の空気と相まってとても清々しいです。
後ろを見ればそこにはとても大きなお家が。
実はこの家、軽音部に所属する紬さんの別荘なんだそうです。
紬さんは、
「ごめんね、また大きいのは借りられなかったの。狭いかもしれないけど我慢してね」
と言っていました。
まだ上があるんだ…
「よーし、荷物置きにいくぞー」
律さんの号令とともに私たちは別荘の中に入ります。
中は紬さんの言葉とは裏腹に、とても広く設備も豪華で掃除も行き届いてるみたいでした。
と。
ここで１つ疑問が。
「憂、どうしたの？」
「う～ん。梓ちゃん、私本当に来て良かったのかな？」
そう。
今回私も参加になったのは急な話。
皆さんのお邪魔にならないかな？
「大丈夫だよ。今回は練習目当てのお泊まりじゃないんだから。そ

れは先輩たちも言ってたでしょ？」
確かに私が律さんから聞いた話では、今回のお泊まりは合宿目当てではなく、純粋に遊ぶのが目的のようです。
私の他にも和ちゃんや純ちゃんにも声をかけたみたいなんですけれど、和ちゃんは委員会の仕事が抜けられないらしく純ちゃんもジャズ研の部活があって来られないみたいです。
「あんまり気にしないで、憂も楽しもうよ」
私に笑いかけてくれる梓ちゃん。
私は梓ちゃんの気持ちが嬉しくて、お言葉に甘えることにしました。
「うん！」
さてさてみんなで荷物を置きに広間に来ました。
各自各々で場所を確保します。
「さて、」
「遊ぶか！」「ご飯食べよう！」
……
律さん　遊びたい
澪さん　食べたい
私も遊びたいけれど、お腹もペコペコで、ご飯も食べたいと思います。
どっちにしよう？
〈ぐぅ〜〉
と。
可愛い音が部屋に響きました。
どうやら律さんのお腹が鳴ったようです。
「てへへ…」
「まずはご飯食べようよりっちゃん♪」
お姉ちゃんもお腹が空いていたのか、律さんに声をかけます。
「そうだな…じゃあ飯にするか」
「「「「「さんせ〜い」」」」」
まだまだ早い時間なのでこれが今日の朝御飯です。

とりあえず取り出したのは食パンと牛乳。
みんな朝は控えめのようです。
「あ、私焼きますよ。パンは何枚にしますか～？」
「私は1枚で」
「私も1ま～い」
「はい！私は2枚で」
「なにっ！？じゃああたしは3枚だ！」
「張り合ってんじゃない。私は1枚で」

えーと、
梓ちゃんが1枚
紬さんが1枚。
お姉ちゃんが2枚。
律さんが3枚。
澪さんが1枚。
じゃあ私も1枚にしようかな。
私は食パンの封を開き、トースターに入れます。
「ごめんなさいね、こちらが呼んだのに。私も手伝うわ憂ちゃん」
席をたって手伝いに来てくれた紬さん。
「ありがとうございます」
素直にお礼を言って、手伝ってもらいました。
「じゃあ私たちは牛乳をコップに注ぐか」
「「ラジャっ！」」
「はい」
澪さんたちもお手伝いしてくれたので、朝御飯の用意はスムーズに済みました。
「それでは」
「「「「「「いただきまーすっ！」」」」」」
みんなで手を合わせて、一斉にパンに手を伸ばします。
パンはすぐに食べ終えられるので、朝御飯はすぐに締められそうで

す。
「りっちゃ～ん。無くなっちゃったから一枚ちょ～だい♪」
「あ、こら唯！勝手に持ってくんじゃねー！」
そして賑やかに朝御飯は終了しました。

「よーし！今度こそ遊ぶぞーっ！」

「「「「「「おーっ！」」」」」」
軽音部一行は水着に着替えて砂浜に集合し、準備運動を終えて遊ぶ用意は万全です。
律さんたちはみんなで海に走り出しました。
私も続こうと思ったんですが、お姉ちゃんの姿が見えません。
どこに行ったのかと思い探してみると、砂浜の真ん中でしゃがみこんでいました。
もしかしたら具合でも悪いのかな？
私は心配してお姉ちゃんに近づきます。
「お姉ちゃん、大丈夫？」
「あ、憂！ねぇねぇ、これ見て♪」
心配していたことが杞憂に終わってホッとしたのもつかの間。
お姉ちゃんは手の中にあるものを見せてきました。
よく見てみるとそれは小さな貝殻。
真っ白な砂浜の定番ですね。
「わ～っ♪綺麗だねぇ～♪」
「でしょでしょ～♪憂も一緒に探そうよ！」
「え？でもお姉ちゃんいいの？」
私とよりも軽音部の皆さんと遊んだ方がいいよ、と言いかけた私をお姉ちゃんは人差し指で遮りました。
「いいのいいの♪行こう♪」
「…うん、わかった♪」
私はお姉ちゃんから誘ってくれたことがとっても嬉しくて…

自然と頬が緩んでしまいます。
私たちはどちらからともなく手を繋ぎ、白い砂浜を歩き出しました。
後ろでは。
「よっしゃー！負けねえからなムギ！」
「こっちだって！」
なんだかビーチバレーで盛り上がってました。
私たちはどこまでも続く砂浜を二人で手を繋ぎながら歩いていました。
右を見れば緑豊かな敷地。
左を見れば空を鏡のように映し出す青い海。
上を見れば雲一つない青空。
雲があっても絵になると思いますけど、私は雲一つない空も大好きです。
そして左手にはお姉ちゃんの温もり。
汗ばんでいるけれど、私はそれも心地良く感じます。
「あ、また見つけたよ♪」
私が綺麗な景色に目を奪われているとお姉ちゃんはしゃがみこんでまた一つ貝殻を拾いました。
「わぁ～、これは大きいね～お姉ちゃん♪」
「うん！この調子でどんどん集めるよ～！」
お姉ちゃんは拾った貝殻を腰に巻いた袋に入れます。
入れ終わると私たちはまた歩き出しました。
「うふふっ♪」
「ん？どうしたの憂？」
「ううん。前に海に来たときもこうやって一緒に貝殻を探したんだよねぇ。懐かしいなぁ…」
私たちが小さい頃。
両親につれられてやってきた海。
その時もお姉ちゃんが手をとってくれて。
二人で砂浜の貝殻を集めていたんです。

「そうだよね～」
「で、集めすぎてお母さんたちに怒られて…」
「あ、あはは…」
ちなみに怒られた私たちは集めた貝殻を砂浜に戻してあげたのでした。
でもそれもお姉ちゃんとの大切な思い出。
私にとってかけがえのない記憶です。
こうやって思い出せるのはとっても幸せなことだと思います。
「憂、もう少し海に近いところを歩いてみよう？もしかしたらもっと大きいのが見つかるかもしれないよ！」
「うん♪そうだね！」
お姉ちゃんに誘われて、私たちは波打ち際まで足を運びます。
サンダルを履いていたんですが、どうしても砂浜は暑かったようで。
海に足が浸かると夏とは思えないような冷たさがとても気持ちいいです♪
「冷た～い！」
「ほんとだ～！でも気持ちいいね～♪」
「うん！」
そうして私たちは今度は波打ち際を歩き始めました。
お姉ちゃんの言ったとおりとっても大きな貝殻がたくさん見つかりだします。
「またおっきいの見つけたよ！」
「すご～い！」
私たちは貝殻を一つ見つけては喜んでいました。
気がつけば結構な距離を歩いた気がします。
と。
歩いていた私たちの目の前に大きな物体が。それは砂浜の中心辺りにありました。
岩かな？
でも表面が滑らかでしかも変な形をしています。

なんだろう？
私とお姉ちゃんは顔を見合わせ、近づいてみることにしました。
「触ってみよう！」
「だ、大丈夫？お姉ちゃん」
「へーきへーき♪」
意気揚々とお姉ちゃんは謎の物体に近づきます。
私もそれに習い、あとに続きました。
ピトッ。
な、なんだかスベスベします。
それにこの形、どこかで見たことあるような…
そのとき謎の物体が身動きしました。
驚いて私たちは後ずさります。
もう少し様子をうかがおうとすると…
キュー…
謎の物体が鳴き声をあげました。
これってもしかして…！
「お姉ちゃん！イルカだよっ！！」
「えっ！？イルカっ！？」
思い出しました。
この形はどう見てもイルカです。
なんで気づかなかったんでしょう？
でもその前になんでイルカが浜辺に？
「ひょっとして、浜辺に流されちゃったのかな？」
「た、大変っ！すぐに海に戻してあげないとっ！お姉ちゃん！」
「うんっ！」
お姉ちゃんと頷き合い、イルカを持ち上げようとします。
けれどもイルカは持ち上がるどころかビクともしません。
そこで私は前にテレビで見たことを思い出しました。
イルカの重さは大体、１８０ｋｇ～２００ｋｇほど。
大きければ３００ｋｇを越えるイルカもいるみたいでした。

「だめだ～。持ち上がらない～」
「そうだ！みなさんに連絡して…」
そう言って私は腰に手を伸ばし、携帯電話を取ろうとします。
でも私の手は空を切るばかり。
そうだ…
携帯は私服の中だったんだ…
ここから引き返すにはちょっと遠いし…
少しでも早くイルカを海に戻してあげたいのに…
どうすれば…
「おお憂！いいこと思い付いた！」
そこでお姉ちゃんは両手を打ち、私に考えを教えてくれます。
「岩を置いて、板か何かで持ち上げるんだよ！」
「てこの原理だね！じゃあ急いで探さないと！」
回りを見てみるとさすが砂浜、一目で見つかりました。
岩は一人では持ち上がらないので、二人で持ち上げてイルカの隣に置きます。
「ちょっと目が回るかもしれないけど、我慢してね」
イルカに声をかけ、厚めの木の板を持ってお姉ちゃんと力を合わせて持ち上げます。
「「うーんっ！！」」
これでもダメなの！？
そう思ったそのとき。
コロンッ
イルカの体が動き、一回転しました。
岩の場所を調節して、もう一回転がします。
コロンッ
コロンッ
あと少しで海に戻してあげられそう。
私とお姉ちゃんはお互いに顔を見合わせ、そして頷きます。
でも。

ミシッ
私たちの持っていた板が嫌な音をたて、見てみると大きなヒビが入っていました。
もう少しなのに…
それでも構わずイルカを転がし続けます。
とうとう波打ち際までイルカを運ぶことができました。
あと一回転がせればイルカは海に入ることができそうですが、板の方も限界のよう。
もしかしたら転がす前に折れてしまうかもしれません。
どうか、板が折れてしまいませんように…
願いを込めて私たちは板を構えます。
「「…うんっ！」」
お互いを見つめ、頷き合います。
これが最後だから。
お願い！
入って！
バキンッ！
力を入れ、持ち上げた瞬間。
板が折れて、私たちは勢い余って後ろに倒れ込んでしまいました。
イルカは！？
大急ぎで立ち上がり、結果を確かめます。
すると。
キュー♪
元気そうに私たちの回りを泳いでいました。
よかった…
本当によかった！
「やったね！憂！」
「うん！」
私たちは互いの手を取り、飛びはねて喜んでいました。
そしてイルカが元気なのを確認してからの触れ合いタイム。

「水族館とかで見たことあるけど、やっぱり近くで見ると違うんだね～、お姉ちゃん」
「そうだね～。それにとっても大人しいね～」
イルカは私たちがさわっている間は動こうとはせずに大人しく待っていてくれました。
それにしても…
「「可愛い～♪」」
本当に可愛くて抱き締めてしまいます。
デジカメを持ってこなかったのがとても残念です。
「お姉ちゃんと同じくらい可愛い～♪」
「憂と同じくらい可愛い～♪」
二人して似たような事を口にしていました。
そのくらい可愛くて可愛いんですから仕方ありません！
けれども日は頭上まで上っていて、お昼であることが確認できました。
そろそろ皆さんのところに戻らなければならないようです。
「お姉ちゃん、そろそろ戻らないと…」
「あ…そうだね」
名残惜しい気もしますが、イルカが無事ならそれでよかったと思います。
お姉ちゃんがイルカに話しかけます。
「私たちね、もう帰らなきゃいけないんだ。だから君とはここでサヨナラになっちゃうんだよ」
悲しそうにお姉ちゃんが言うと、気のせいでしょうか。
イルカの方も悲しそうな表情をしたような気がしました。
すると屈んでいたお姉ちゃんの頬に。
チュッ。
イルカがキスをしてくれました。
そして私の頬にも。
チュッ。

お姉ちゃんと同じようにキスをしてくれました。
きっとイルカなりのお礼だったんでしょう。
「「ありがとう♪」」
私たちはお礼を言い、イルカから離れると。
キュー…
イルカは一鳴きして沖の方に帰っていきました。
「行こうか憂」
「うん」
イルカが仲間の待っている海に帰っていったように、私たちも軽音部の皆さんのいる場所に向かって歩き出しました。

「へぇ～！イルカか～！あたしも見たかったな～」
「でしょ～？もうね、なんて言ったらいいのかわかんないくらいかわいかったよ～♪ね～憂♪」
「ね～お姉ちゃん♪」
帰ってきた私たちは皆さんにイルカの事を話していました。
皆さんはまたすぐに海に戻れるよう、水着に上着を羽織ってお昼ご飯を食べています。
「運がよかったんだな、唯と憂ちゃんは」
「いや～そうなんだよ～！羨ましいでしょ澪ちゃん？」
「べ、別に羨ましくなんか…」
「澪ちゃん、顔に書いてあるわよ？」
「なっ！？ムギっ！」
「うふふ♪でも本当に運が良かったのね二人とも」
皆さんの言うとおり、私たちは運がいいのだと思います。
海に遊びに来ただけなのに、とっても素敵な出会いをすることができました。
すごく嬉しくて、感動しています♪
「ほんとですよ～。いいな～、私もイルカ見たかったな～」
羨ましそうに私たちを見ている梓ちゃん。

私たちも見せてあげたかったんですけど、場所が場所でしたしイルカもあのような状態でした。
どう考えても見せてあげられるような状況ではなかったのです。
せめて写真だけでも残せてあげられればよかったんですけど。
「ま～いいじゃねぇか♪唯たちが見られたってことはあたしたちだって今日中に見られるかもしれないんだぜ？」
律さんの言うとおり、私たちが見たのもつい先程。
皆さんが見られる可能性だってあります。
もしかしたら私たちもまた出会えるかもしれませんしね♪
そう思いつつ、私はお昼ご飯の焼きそばを頬張っていました。
お姉ちゃんを見てみるとすでに食べ終わっていたようで、腰かけていた階段に横になっていました。
「はぁ～♪お腹いっぱ～い♪」
「唯ちゃん、食べてすぐ寝ると豚になっちゃうわよ？」
「それを言うなら牛じゃないか？ムギ」
律さんのツッコミを受けている紬さんはとっても嬉しそうです。
私もこの放課後ティータイムの和やかな空気、大好きです♪
「どうせなら唯、海に浮いてきたらどうだ？」
澪さんはお姉ちゃんに大きなゴムボートを指差します。
「あ～、それもいいね～♪憂もどうだね？」
お姉ちゃんはゴムボートを持ち出して私にも聞いてきました。
もちろん断る理由はありません。
「じゃあご一緒してもいい？」
「もちろん！」
お姉ちゃんは勢いよく立ち上がり、ゴムボートを持って海に走り出します。
「あ、待って！お姉ちゃん！」
私も急いで後に続きます。
とと、その前に。
「皆さん、行ってきますね♪」

「「「「は～い♪」」」」
軽音部の皆さんは快く私たちを送り出してくれました。
私たちは見送りを受けて海へと飛び出します。
私たちを乗せたゴムボートはユラユラと波に揺られながら浮いています。
お姉ちゃんは相当眠かったのか、浮きはじめてからすぐに寝入ってしまいました。
「すぅ…すぅ…」
隣からは健やかな寝息が聞こえてきます。
顔を覗けばそこには安らかな寝顔。
とっても幸せそうです。
「ふ…あぁ」
私の口からもあくびが出てしまいました。
少しだけなら…いいですよね？
私もお姉ちゃんの隣にコロンと横になります。
目の前に映るのは雲一つない青空。
波に揺られる度に私の眠気も深くなっていきます。
気持ち良い…。
「ふ…あぁ」
最後にもう一回あくびをして、私は眠気に耐えられなくなって目蓋を閉じました。
…
……
……
パチッ。
目を覚ました私は起き上がって大きく伸びをします。
「う、う～ん。はぁ」
伸びをし終わって私は回りを見渡します。
…
……

……
え？
気のせいでしょうか？
私たちがいた浜辺が遠退いてるような。
いえ気のせいではありません。
このまま流されてしまったら…私たちはどうなるのでしょう？
嫌な考えが頭をよぎります。
焦った私はお姉ちゃんを起こしにかかります。
「お姉ちゃん！お姉ちゃん！」
ゆさゆさ！
「う…う～ん」
何回も揺らして、お姉ちゃんはやっと起きてくれました。
「どうしたの？憂」
眠たそうな目を擦りながらお姉ちゃんは私に聞いてきます。
けれども私には落ち着いていられる余裕は無く、お姉ちゃんの肩を揺らしながら説明します。
「ど、どうしようお姉ちゃん！私たちこのまま流されちゃって漂流しちゃうんだよ！！」
「わぁ！お、落ち着いて憂！」
「あ、ごめん…」
私はお姉ちゃんになだめられて肩を揺らすのを止めます。
揺らしすぎたからでしょうか、お姉ちゃんは目を回していました。
「きゅ～」
「だ、大丈夫？」
「な、なんとか…」
ほっ。
揺らしすぎてまたお姉ちゃんが寝てしまうところでした。
視界が回復したお姉ちゃんは私たちのいた浜辺が遠くにあることを確かめます。
「なーんだ。結構近くにあるじゃん」

「え？お姉ちゃん、このまま行くと私たち本当に漂流しちゃうかもしれないんだよ？」
予想外のお姉ちゃんの言葉に私は動揺を隠せなくて、思わず訊ねてしまいます。
「え？だって浜辺が見えてるってことはそっちにオールを漕げばいいんでしょ？」
「え？それはそうだけど…」
「だったら私たちは漂流しないよ。それは浜辺が見えなくなってどっちに漕いだらいいかわかんない時でしょ？」
お姉ちゃん、そこまで考えてたんだ。
私は慌てていてそこまで考える余裕はありませんでした。
あんなに取り乱しちゃって、私ったら恥ずかしい…
やっぱりお姉ちゃんはすごいな。
改めて尊敬してしまいます。
「だけど…」
「うん…」
「「すごく大変だろうねぇ…はぁ」」
オールを漕ぐ、という気の遠くなるような作業を前に、私たちはお互いに声を合わせてため息をついてしまいます。
けれども漕がなければ本当に漂流してしまいかねません。
それだけはなんとしても避けたいので私たちはオールを手にとります。
漕ぎ出そうとしたそのとき。
キュー！
なにか鳴き声のようなものが聞こえてきました。
しかもつい最近聞いたことのあるような…
私たちは辺りを見渡し、鳴き声の正体を突き止めました。
その正体はさっき私たちが浜辺で助けてあげたイルカさんだったみたいです。
え？

どうしてわかるのか？ですか。
なんとなくです♪
イルカはゴムボートの縁に頭を乗せて気持ち良さそうにしていました。
「あ！さっきのイルカさんだ！」
お姉ちゃんが喜びながらイルカさんの顔に近づきます。
やっぱりお姉ちゃんもさっきのイルカさんだってわかったみたいです。
「よーしよしよし♪よーしよしよし♪」
「お、お姉ちゃん犬じゃないんだから…」
キュー♪
でもなんだかイルカさんは嬉しそうです。
でもなんで私たちがここにいるってわかったんでしょう？
もしかして私たちが海に出た時から見ていたのでしょうか。
でも私もまたイルカさんに会えて嬉しいです。
「あのねイルカさん。私たちね、あの浜辺に帰りたいんだけどねなんとかなんないかな？」
お姉ちゃんが唐突にイルカさんに聞きました。
さすがにそれはどうにもできないんじゃ…

するとイルカさんが鳴き声をあげます。
キュー
「ほ～」
キュキュー
「ほ～ほ～」
キュキュキュー
「なるほど！」
な、なんだかイルカさんが会話しているみたいに鳴き声をあげています。
そしてお姉ちゃん！

「わかるの！？」
「全然わかんない！！」
思わずボートの上でこけてしまいました。
でもイルカさんはなにかをしてくれるみたいですけど、何をしてくれるんでしょうか？
するとイルカさんは頭を乗せていた場所とは反対の場所にまた頭を乗せました。
すると私たちのゴムボートがいきなり浜辺に向かって進み始めたのです。
どうやらイルカさんは後ろから押してくれているみたいでした。
「お～！はやいはや～い！」
「気持ち良い～♪」
私たちは風を切って進み、潮風が髪を撫でていきます。
あっという間に私たちは浜辺の近くまで来ていました。
「ありがとう♪助かったよ～」
「ありがと～♪イルカさん♪大変だろうからこの辺で大丈夫だよ♪」
お姉ちゃんがイルカさんに言うと、イルカさんはキューと一鳴きして海のなかに潜っていきました。
そのかわり潜っていく時に尾びれを私たちに向かって振っていたような気がします。
まるで「またね」と言っているかのようでした。
私たちは頷き合い、そこから初めてオールを漕ぎ始めました。
といっても浜辺はすぐそこなんですけどね♪
浜辺に到着するとホッとひと安心することができました。
でも思い出したら大変だったような。
面白かったような。
でもイルカさんにまた会えたのですから、私たちはとっても幸運なのかもしれませんね♪
「とうちゃーく！」
お姉ちゃんが高らかに大声を上げると、軽音部の皆さんが集まって

きました。
「おーおかえりー。どこまで行ってたんだよ？」
「ちょっと沖の方まで…」
「そんなに寝てたのか！？まあそろそろ夕飯の準備しないといけないから別荘に戻ろう」
「はぁ～い」
時間を見てみると私たちが海に出てから二時間ほど経っていました。
私も結構寝てたんですね。
とりあえず私たちは紬さんの別荘に戻ることにしました。
「あら？唯ちゃん綺麗なもの持ってるのね」
「ほぇ？」
紬さんはお姉ちゃんが腰に下げていた貝殻の事を言っていたみたいです。
「うん！いっぱい拾ったんだよ！」
「あらあら♪あ、そうだ！唯ちゃん、その貝殻を使ってアクセサリーを作ってみない？」
突然の紬さんの申し出にお姉ちゃんは目をキラキラと輝かせながら答えます。
「え！作れるの？作りたい作りたい！でもどうやって？」
お姉ちゃんは紬さんにどうしたら貝殻でアクセサリーを作れるのか訊ねているようです。
それは私も気になりますし、ぜひ作ってみたいです！
「それはね、これを使うの」
そう言って紬さんが取り出したのは糸のような、でもピアノ線のような細長いもの。
しかも両端の先端には器具がついていて、どうやら取り外しができるみたいです。
「これはね、ウチの会社の新商品なんだけど。見た目はこれだけ細くても絶対にちぎれることがないの！しかも伸び縮みまでするからゴムみたいにも使えるの♪」

紬さんはテレビショッピングの紹介している人みたいに体全体でアピールしながら私たちに説明してくれました。
とりあえず特徴としては
絶対にちぎれることがありません。
両端の先端に留め具がついていて取り外しが可能です。
もちろん留め具自体も取り外しが可能です。
ゴムみたいに伸び縮みします。
まとめるとこのような感じになりました。
紬さんはこれを使って貝殻のアクセサリーを作るみたいです。
「わかった！よーし、やるよー！」
「おー！」
お姉ちゃんはヤル気満々みたいで私もつられて声をあげていました。
「…晩ご飯は？」
「でも面白そうじゃん？あたしたちも見てようぜ？」
こうして私たちは晩御飯の用意を置いておいてアクセサリー作りを開始したのでした。

アクセサリー作りが終わって私とお姉ちゃんはサンセットの浜辺へと足を運んでいました。
まだ晩御飯の準備には早かったので、私たちは散歩がてらに来ていたのです。
夕方の風は涼やかで、昼とはまた違った心地よさを感じます。
そして、私たちがここに来た理由はそれだけではありませんでした。
ここに来ればまた会えるような、そんな感じがしたのです。
それはお姉ちゃんも同じようで。
「…来るかな？お姉ちゃん」
「来ると思うよ♪絶対！」
「…うん！私もそう思う♪」
私たちは波打ち際のちょうど波が来ない辺りに腰を下ろして太陽の

浮かんでいる海を眺めました。
綺麗です…
私はデジカメを片手に写真を一枚撮ります。
さらに私たちの手のなかにはさっき作ったばかりの貝殻のアクセサリー。
準備は万端です！
ザァァァ…
波の音を聞きながら。
私たちは待ちます。

果たしてイルカさんは私たちのプレゼントを喜んでくれるでしょうか？
待つこと十数分が過ぎました。
すると。
キュー。
今日初めて出会ったばかりなのに、見慣れた顔を海から覗かせていました。
やっぱり…来てくれたんです。
私たちは再会を喜びながらイルカさんに近づいていきました。
「また会えたね…イルカさん」
私は三度イルカさんに会えたことが嬉しくて話かけます。
お姉ちゃんは嬉しすぎて私服なのにイルカさんに抱きついてびしょ濡れになっていました。
私もお姉ちゃんと同じくらい嬉しいので、負けずに反対側から抱きつきます。
「あ！そうだ！イルカさんにプレゼントがあるんだよ♪」
そう言ってお姉ちゃんが取り出したのは先程作った貝殻のアクセサリー。
私とお姉ちゃんの合作です。
イルカさんもそれを見て喜んでくれているみたいです。

「でもどこにつけよう？」
「尾びれのところがいいんじゃないかな？」
「おお！さすが憂！じゃあちょっと失礼して…」
お姉ちゃんはアクセサリーの留め具をはずしてイルカさんの尾びれの根本に取り付けました。
「わぁー♪すごく似合ってるよ♪」
私とお姉ちゃんは自分たちで作ったアクセサリーがイルカさんに似合っているのが嬉しくて、二人で拍手をしました。
イルカさんも鳴き声をあげて喜んでくれているみたいです。
「…お姉ちゃん、そろそろいいんじゃない？」
「…そだね」
私はキリの良いところでお姉ちゃんに話を持ちかけます。
それは…私たちは明日にはここを去り、帰らなければならないんです。
だから残された時間をたった一分一秒でもイルカさんとふれ合いたかったんです。
でもそろそろ時間が来てしまいました。
私たちは今から晩御飯を食べたら寝て、朝には帰らなきゃなりません。
きっと…
これがイルカさんに会える最後の機会…
「ぐすっ…」
「泣かないで、お姉ちゃん…」
「ご、ごめんね憂…でも」
「うん…わかってる」
お姉ちゃんと一緒でイルカさんと別れるのはとても悲しいです。
でも別れるときは笑顔が一番なんです。
でも…
泣いてるお姉ちゃんを見てたら…
「ぐすっ…お、お姉ちゃぁん…」

「憂…」
キュー？
イルカさんがどうしたの？と聞いてくれているかのように鳴き声をあげます。
そう。
私たちには泣いている暇はありません。
私とお姉ちゃんはお互いの目に浮かぶ涙を拭いて、イルカさんに向き直りそして笑いかけます。
「ううん、なんでもないなんでもない！」
「そうそう！なんでもないよ♪」
目に浮かぶ涙は押さえきれないけれど…
私たちは頑張って笑顔を浮かべて。
「…ごめんね。私たちは明日、私たちの住んでいるところに帰んなきゃなんないの…」
キュー…
お姉ちゃんの言葉にイルカさんは悲しそうな表情をしました。
そこで私はあるものを持ってイルカさんに話しかけます。
「えっと…これわかる？カメラって言うんだけど」
それは私がいつも使っているデジカメともうひとつ。
なぜか紬さんが持っていたインスタントカメラ。
しかも撮った写真がその場で出てくるタイプのものでした。
私も使うのは初
めてなのであまり手慣れてはいません。
ですけど使い方は教わったのできちんと使えば使いこなせるはずです。
といってもボタンを押すだけなんですけどね。
思い出は形に残すのが一番と、紬さんが貸してくれたんです。
イルカさんはカメラが何かわからないようみたいです。
それはそうですよね。というわけで実際にやってみることにしました。

実は三脚も借りてきたのでみんな一緒に写ることができます。
お姉ちゃんが先にイルカさんの右側に。
準備ができたのを確認して、私はカメラのタイマーをセットします。
そして急いでイルカさんの左側へ。
カメラに向かってピースサインを掲げたと同時に、カメラがパシャッと音をたてます。
するとすぐに写真が出てきました。
といっても出てきた写真は真っ黒です。
「えー憂、真っ黒だよ～？指で隠れちゃってるんじゃないの～？」
「お姉ちゃん、私そのときカメラに触れてないから…」
お姉ちゃんになかばあきれつつ、私たちはしばらく待ちます。
するとしばらくして真っ黒な写真が徐々に色づき、私たちが浮かび上がりました。
出来上がった写真をイルカさんに見せてあげます。
「綺麗に撮れてるでしょー？」
キュー♪
うふふ♪
とっても喜んでくれてるみたいです。
そこで私は出来上がった写真をくるくると丸めます。
イルカさんにさっきつけたアクセサリーに近づいて、一つだけ付いていたカプセルを手に取ります。
それを開けて私は丸めた写真をカプセルに入れ、元通りに封をしました。
これはイルカさんの分です。
そしてここらは私のデジカメで私たちだけの撮影会が始まりました。
一通り撮り終わって、もうそろそろお別れの時間です。
今度こそは…
今度こそは笑顔になってみせます。
「それじゃぁ…」
「お別れだね…」

私たちはまた、イルカさんに抱きついていました。
もう服が濡れてもお構いなしに、強く抱きつきます。
キュー…
イルカさんもとても悲しそうな表情をしていました。
そして私たちは抱きつくのをやめて、浜辺の中央まで戻ります。
ふりかえると、イルカさんは私たちのことをまだ見ていてくれました。
でも私たちが手を振ると、イルカさんは一鳴きして海へと帰っていきました。
でも最後にイルカさんが見せてくれたのは…
思いっきり海の中から高くまで飛び上がる大ジャンプ。
「「わぁ…」」
私たちは感動して、それしか言葉を発することができませんでした。
それから再びイルカさんは海に潜っていきました。
イルカさんのサプライズを見た私たちは、なんだか元気が出てきました。
「行こうか？」
「うん！」
私たちは紬さんの別荘へと足を向けて、ゆっくりと帰りました。

その日の夜はお姉ちゃんと一緒に寝ることにしました。
元々部屋割りで一緒だったんですけど、私はお姉ちゃんの布団に潜ります。
私たちは夜遅くまで今日起こった出来事を語り合っていました。
翌朝。
私たちは駅のホームに行って、帰りの電車に乗り込む途中でした。
「ほら唯、憂ちゃん。乗ろうぜ？」
気を使ってくれたのでしょうか。
律さんは私たちの方に手を乗せて優しく笑いかけてくれました。
「うん！」

「はい！」
私たちは元気よく返事をして、電車に乗り込みます。
ドアが閉まって、私たちを乗せた電車は出発しました。
その電車の窓から見える海を、私とお姉ちゃんは名残惜しく見つめていました。
と。
何か海から見えたような…
お姉ちゃんを見ると同じことを思ったようで、私のことを見ていました。
もう一回海を見つめます。
やっぱり…
見間違えではありませんでした。
それは海から飛びあがりながら私たちの乗った電車を追いかけていたイルカさん。
それはイルカさんから私たちへの最後のサプライズだったのかもしれません。
私とお姉ちゃんは勢いよく窓を開け、お行儀が悪いと思っても私たちは体を乗り出して両手を大きく振りました。
「さようなら～っ！」
「ばいば～いっ！」
見ると後ろには軽音部の皆さんが顔を除かせて、私たちと同じように両手を振っていました。
海が見えなくなっても、私たちはしばらくの間乗り出した体をそのままにしていました。
「お姉ちゃん！」
「なぁに？憂」
「また来ようね！」
「うんっ！」
私たちはまたこの場所に来ることを約束しました。
そして、絶対に忘れることのない私たちのひと夏の出来事が終わり

を告げるのでした。
おしまい

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2887t/

一夏の思い出

2011年6月3日05時05分発行